

「無言館」シリーズ 4・・・第三章 弟よ

□今回は『テノールソロと混声合唱のための組曲「無言館」』の「第三章 弟よ」について、すでに「無言館」シリーズ2〈無言館への旅〉に載せましたが、それに加えて、『遺された画集 戦没画学生を訪ねる旅』（野見山暁治 2004年 平凡社）から補足として抜粋引用させていただきます。

伊沢 洋

昭和18年8月17日東部ニューギニアにて戦死。26歳。

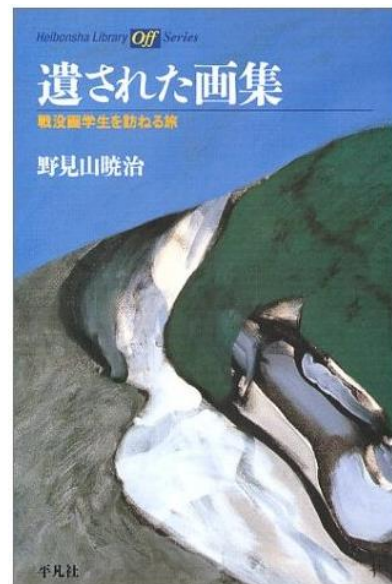
▼兄も絵描きになりたかったが、貧しい農家の跡取りとして、土地を捨てて行くようなことはとても言い出せたものではなかった。

弟は、中学を卒業して3年、自分の気持ちを言い出せないまま毎日の野良仕事がつづいたある日、野良で馬を使っていてかなりの怪我をした。不用意にも心はここになかったのだ。ウツウツとした日々的心情をさっした兄や知人の助言によって伊沢は東京へ出させてもらえることになった。美術学校に入れたものの、わずかな入学金と月謝が払えぬので、兄は大事にしていた櫛を切って金に替えた。

▼家族の1人ひとりを組み合わせた構図の少し大きなこの油絵は、なにか黙劇を見るような無言の慈愛がお互いに照応しあって、伊沢が生まれたこの貧しい家への愛着が滲んでいる。



まかい、漂白したような粒子がキラキラと盛りあがって出て来た。骨を焼いた後のような色をしているでしょう、と兄さんは言って、いつもそのようにして見つめているのか、ゆっくりと手順よくまた包んでいった。



▼出征する前日、この絵を塗りつぶそうとして家人にみつきり筆をとりあげられたという。別離の決断でもあったのであろうか。

▼伊沢の属した中隊は転戦しているうちに、出征時194名だったのが、最後のニューギニアの激戦で生き残ったのは伊沢をふくめ6名だったという。

▼戦争も終わったある日、生きて帰って来た同じ地区出身の中隊長からニューギニアの砂がこの家に届けられた。兄夫婦は大事そうにその丸い包みを棚から出して私の前に置いた。零れ（こぼれ）ないように幾重にも包まれた紙を少しずつ開いてゆくと、キメこ